2012年（平成24年）
第53号
（5月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

６００枚超の毛布が集まる～アフリカへ毛布をおくる運動～

来月３日に発送式を実施へ

４月１日から始まった「アフリカへ毛布をおくる運動（以下、同運動）」のキャンペーン期間も残り半月になった。京都教会では、６月３日（日）に行う発送式をもって終了する予定だ。

キャンペーン期間中、各支部の会員はチラシをもって地域を回り、事業所を回って、同運動をＰＲしている。その成果もあって、５月10日現在、600枚を超す毛布が教会に集められている。

教会に集められた毛布

集まった毛布に、実行委員が用意したメッセージを、毎日当番修行に来た会員が縫い付けている。平和を願う思いをこのメッセージにのせて、毛布と一緒に届けようとするものである。

同運動は会員の地道な努力に支えられている。ある会員は、一軒ずつ訪問し、チラシを配布し、同運動への協力を依頼した。ほとんどの方はチラシを受け取ってくれたという。

メッセージを縫い付ける会員

明るい社会づくり運動の会が主催するバザー会場でも呼びかけ、毛布を収集した。

毛布に貼られたメッセージ

以前から会員が協力依頼していた、綿久リネン株式会社から 500 枚まとめて届けられた。

会員が初めて訪ねた方から、同運動の趣旨に賛同してもらい、すぐに毛布の提供を受けた上に、海外輸送協力金も一緒にいただいたという。

古田実行委員長は「多くの人の善意にふれ、平和を願う思いを共有化し、この運動に取り組んだ人たちが平和な心になっていかれることで、世界の平和に役立つことができる」と述べていた。

ゆめポッケキャンペーン　来月スタート

今年も「ゆめポッケ・キッズキャンペーン」が６月１日からスタートする。同キャンペーンは、紛争や対立で傷ついた世界の子供たちの心をいやすため、文房具やおもちゃなどを詰めた手作りのポッケをおくる運動で、今年で14年目を迎えた。

京都教会では、６月１日に開始式、３日に学習会が開かれ、８月31日までの３カ月間、ポッケ作りが行われる。親子で取り組み、家族との対話などを通して、子供たちが平和の心を持つようにと願い、取り組まれる。

お知らせ（６月の教会行事）

６月	１日（金）	朔日参り・布薩の日	9：00～
		同　夜間ご命日	19：30～
	３日（日）	アフリカへ毛布をおくる運動 発送式	10：00～
	４日（月）	開祖さまご命日（各支部で実施）	
	１０日（日）	脇祖さまご命日	9：00～
	１５日（金）	釈迦牟尼仏ご命日	9：00～
		同　夜間ご命日（各支部で実施）	

時事刻々

五月十五日に京都三大祭の葵祭が催される。わが国で最も優雅で古趣に富んだ祭と言われている。京都御所から下鴨・上賀茂神社まで、総勢五百名以上の優雅な行列が市内を練り歩く▼辞書によると、「まつり」というと葵祭をさすという。わが国の祭の中でも数少ない国家的行事と行われてきた祭で、起源は奈良時代にさかのぼり、約千四百年の歴史をもっている▼欽明天皇の五六七年、国内は風雨が激しく、五穀が実らなかったので、四月吉日に祭礼を行ったところ、風雨はおさまり、五穀は実り国民も安泰になった▼庭野日敬開祖は著書『平和への道』で、平和とは「人と人の間、人と自然との間に、和やかさと、順調さが保たれている状態」だと述べている▼昨年の大震災や先日の竜巻と、人と自然の状態は異常だ。政治や経済も順調とは言えない。各地で行われる祭とともに、平和を願い、幸せを祈るように心掛けたい。

明るい社会を目指して　GWに各地区明社がさまざまな活動を展開

市民と“ふれあい”もちつき大会【中央明社】

4月29日、中央明るい社会づくり運動の会（中央明社）は、京都三条会商店街振興組合事務所前で「ふれあいもちつき大会」を実施した。このもちつきは一昨年に続き3回目。

若者から年配者まで、外国人や府議会議員など、飛び入りで餅をつく姿が見られた。東京から観光で来た家族連れは「餅つきを初めて見た」という子供に杵を持たせ写真を撮るシーンもあり、多くの方とのふれあいができた1日だった。

事前に中央明社の会員が摘んできた「よもぎ」で作った「よもぎ餅」も加わり、約450個の餅が完売した。今後も継続して、地域とのきずなを深め、明るい社会づくりに努めていきたいとしている。

「第22回福祉バザール」を開催【宇治明社】

5月6日、宇治市総合福祉会館前において、宇治明るい社会づくり運動の会（宇治明社）主催の「第22回福祉バザール」が開催された。バザー会場では「アフリカへ毛布をおくる運動」のＰＲや、東日本大震災の被災地へ送る「うちわメッセージ」の呼びかけが行われ、多くの市民と交流した。今回のバザーの収益金327,823円は宇治市社会福祉協議会「ふれあい基金」へ寄付された。

歴史ある藤森神社で清掃奉仕【伏見明社】

4月29日、伏見明るい社会づくり運動の会（伏見明社）は45名が参加して、藤森神社境内の清掃奉仕を行った。

藤森神社は伏見区の中程に在り、菖蒲の節句（子供の日）発祥の神社としても知られ、学問の神として崇敬されている。また勝運と馬とのかかわりが深く、馬の神様として親しまれ一年を通じて多くの参拝者が後を絶たない。

さらに、5月5日の駈馬神事（かけうましんじ）当日の早朝にも17名が参加して、清掃奉仕を行った。

満開の桜の下で親睦を深める～伏見支部～

4月14日、伏見支部では中書島の伏見港公園で「春の集い」を行なった。事前から青年部が中心になって、同集いの内容を企画した。

当日は青壮一般55名が参加し、桜の木の下、和やかなひとときを過ごした。明るく優しく温かい支部家族となり、心をひとつにした集いとなった。

“こころひとつに”　書家　吉川壽一先生揮毫

5月1日、世界を舞台に活躍中の書家・吉川壽一（じゅいち）氏が、京都教会の体育館にて縦横8mの白布に『こころひとつに～一心』を大書した。

吉川氏は1943年1月7日、福井県福井市に生まれ、「奎星賞」を受賞、その後も、毎日書道展グランプリ、福井市民文化賞、毎日書道顕彰など多くの賞を受賞。近年は、6年前のＷＣＲＰⅧの京都国際会議場に『道』を揮毫（きごう）した。

完成した吉川氏揮毫の書「一心」は、11月4日に京都教会で開催される**「開祖さま報恩祭」**で会員に披露される予定。

●お見通し

切れば血の出る教え（校成会のことば）

脇祖さまは「仏さまがお見通しだよ」とよくおっしゃいました。「お見通し」とは、自分の行いや心のあり方を仏さまはすべてお分かりになっているということです。また、先輩幹部が自分の心得違い、思い違いを見透かしている時にも、「お見通し」という言葉が使われます。この言葉にはどこ中心の心になることに歯止めをかける――自戒心を起こし、陰日なたなく仏さまの教えを守って精進する人間になるようにとの願いが込められています。

校成会では草創期から「このご法は切れば血の出る教えですよ」とか、「打てば響く教えですよ」とよく言ってきました。これは「実行すれば、必ず結果がいただける」という１００％救われる『法華経』の教えに対する絶対的な信から出た言葉です。

今月の言葉　～笑顔こそ仏性開顕への近道であり、慈悲の実践～　京都教会長・佐藤益弘

先月は京都の祇園に続いて亀岡市においても自動車による重大な事故が起きました。それぞれの事故により、お亡くなりになった方に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。また、負傷された方に心からお見舞いを申し上げます。

弊会・機関紙『佼成』５月号に掲載されております開祖法語録の中に、インドの大詩人で、東洋人として初のノーベル賞を受けた、タゴールの言葉が紹介されています。それは「人間の自由は、苦痛を救われることにあるのでなく、その苦痛を愉悦の一要素に変えるところにある」というものです。どうしたら苦痛を愉悦に変えることができるか、それは、我を捨てることであり、真の自由は我を捨てるところにこそあると開祖さまは述べておられます。

同じく『佼成』５月号では**「心を開く笑顔」**というご法話を会長先生からいただきました。

特に会長法話の前半で、**「ユ―モア・笑いの効用」**のお話が綴られておりますが、その効用について私なりに整理させて頂きますと、以下のようなものになります。

① かたくなな人の心を開く
② 人間関係に調和をもたらす
③ 受け入れ難い現実を受けとめて乗り越えていく
④ 柔軟性やしなやかさを心に与える
⑤ 生き抜く力の源となる
⑥ 心がやわらぐ
⑦ ゆとりが芽生える
⑧ 救いが生まれる

これほど多くの効用があるのですから、ユ―モアをもって笑わなければ勿体ないと思いました。

会長法話の後半にある**「笑顔は思いやり」**というお話を通して、会長先生から大丈夫ですよ、だれでも笑顔でいられますよとおっしゃって頂いているように思います。また、様々な功徳があり、仏さまの教えからも重要な意味があることを教えてくださっています。

それは、笑顔が苦手な人であっても笑顔を日々心がけて実践し、習慣となれば自然な笑顔に変わっていくということです。つまり誰でも努力すれば笑顔になれるということです。

次に笑うことで筋肉がほぐれる一方、笑顔を浮かべていると、心も明るく前向きになるというように、身心相即の理にかなっているということです。ノートルダム清心学園・理事長の渡辺和子先生は、**「心を美しくする三つの化粧品」**というお話をされています。その一つ目は、いつもニッコリ笑うことだそうです。二つ目は、人の身になって思うこと。三つ目が、自分の顔を恥じないことと、おっしゃっています。まさに身心相即の理で、**笑顔によって心も明るく、美しくなれる**と教えてくださっています。

また、人とのあいだになごやかであたたかな関係がうまれていくということです。

さらに笑顔は誰でもできる布施であり、慈悲の実践、「和顔施」であって、思いやりそのものであるということであります。

以上、学ばせていただき、私自身今月は、開祖さまの法語録にあります、我を捨てて自由に生きることを目指したいと思います。そのためにはニッコリ笑って生活することが必要であり、そうすると何ごとも有り難く感謝で受けとめることが叶うものと信じます。

まさに若葉の、みずみずしい緑と風薫る素晴らしい季節を迎えました。これも仏さまからの授かりものと感謝し、笑顔を忘れずに過ごして参りたいと思います。

ひと・まち交流館で庭野平和賞シンポジウム

５月 12 日、京都市下京区の「ひと・まち交流館」において庭野平和財団･京都シンポジウム 2012 が開催され、多くの来賓や立正佼成会近畿支教区の各教会から約 150 名が参加した。第 29 回庭野平和賞受賞者ロサリーナ・トゥユク・ベラスケス氏の基調発題のあと、パネルディスカッションが行なわれた。

同氏が生まれ育ったグアテマラは、36 年間の悲惨な内戦があり、世界で最も暴力に満ちた国のひとつとされている。人口約 1,000 万人の国民のうち、25 万人を超える人々が命を失った。同氏の父と夫もその犠牲者だった。そして、その遺体が埋められた場所は未だに分かっていないという。

そして、同じ犠牲に会った女性たちと「連れ合いを奪われた女性たちの会＝コナビグア」を設立。非暴力平和運動を推進し、虐殺犠牲者の埋葬地を探し出し女性の尊重を求めて活動を進めている。

同氏は先住民族（マヤ民族）で、マヤの教えをもとに活動している。人と自然との調和を大切にしている。東日本大震災のような自然災害は、人類にメッセージを発しているのだという。

人や自然に対する暴力や破壊といったものに、一人ひとりがよりセンシブルに（感受性を強く）生きなければならないと主張した。

庭野開祖の宗教観･平和観　「一乗の道」

≪メルボルン会議≫

メルボルン会議の基調テーマは、「平和は信頼の醸成から…宗教の役割」と定められた。世界82ヶ国から諸宗教の代表600人が参加した大会の開会式で、庭野開祖は仏教の「諸法無我」の法門を引用して挨拶をした。

「この宇宙、この世界に存在するすべてのものは、他と関係なしに存在しえないというのが、仏教が明らかにしている真理の一つであります。そして、その真理を自覚し、それにのっとって生きる時に真の平和が実現すると仏教は説きます。この、すべてのものが関係しあい支え合っている関係を、仏教では「縁」と表現するのです。

いま話している私と、皆さまの間には何も存在してないように見えますが、私と皆さまの間には、世界平和のために共に働く宗教者同士という縁が存在しているのです。その縁によって私たちはいま、ここに集まっています。このような意識の共通の基盤に立って、本会議の主題である『平和は信頼の醸成から・・・宗教の役割』という基調テーマにそった有意義な討論が展開されることを期待するものであります」

世界は、ようやく緊張緩和へ向かいつつあるかに見えた。米ソ間に INF(中距離核戦力)全廃条約が締結され、両国が大陸間弾道ミサイルの削減に向かうだろうという希望が見え始めていた。庭野開祖はさらに言葉をついだ。**『核兵器の出現によって、もはや戦争は不可能であることを世界が認識したといっても過言ではありません。国民の経済生活を犠牲にして軍備を拡張するなどという考え方は過去のものとなりました。**

それに代わって、互いに助けあい支えあう融和の世界を構築する道を築き上げるほかに、人類が生き残る道はないと世界は気づき始めています。私たち宗教者は、具体的にその道を示すために力をあわせ、全力をふりしぼらなくてはなりません』私たちは、人々の宗教に対する無関心を嘆くのではなく、まず自らが平和の使途としての使命に立って、その生き方を、身を持って示さなければならない。」

庭野開祖は、この開会の挨拶を高村光太郎の詩を引用して締めくくった。「花よりさきに実のなるやうな。種子(たね)よりさきに芽の出るやうな。夏から春のすぐ来るやうなそんな理屈に合はない不自然をどうかしないでいて下さい」本当に平和を願うのならば、まず心に平和の種子を蒔き、平和を阻害する雑草を摘み取り、心の田を耕す地道な努力を続けなければならない。その努力を惜しんでは、平和はいつまでたっても姿を見せることはない・・・。

会議は全体会議と研究部会・小部会に分かれて、平和への具体的な貢献の道を探っていった。研究部会は、「非武装」「人権」「開発・環境」「平和教育」の諸課題の解決の道がそのまま信頼の形成につながっていることを、共通の認識として確認し合う形で進められた。そして、**「信頼は行動的なものである。宇宙の創造的力に対する信心である」**とうたった「メルボルン宣言」が、全員一致で採択されたのであった。

≪相携えて大道を歩まん≫

庭野開祖が85歳の誕生日を迎えた平成3年11月15日。その朝は、いつもどおりに静かに明けた。この日、立正佼成会の**「法燈継承」**が行われることになっていた。これまで庭野開祖が就いていた会長位を委譲し、立正佼成会第2代会長が誕生するのである。

5時に起床、お茶を頂いている所に、長男の庭野日鑛新会長が挨拶に来た。「今日は、いつもより少し緊張気味という所です」。6時、いつも通り、庭野開祖が導師を勤め、家族そろって読経供養を行った。佼成会では、白地に「南無妙法蓮華経」と墨書したおたすきを僧侶の袈裟の意味で用いている。読経供養やご宝前(仏壇)の給仕などの時、心身を清めるためにこれを肩にかける。法華経に帰依し、その修行者としての精進を誓う心を形にあらわしたもので、信仰の証を意味する法具である。

ご供養のあと、庭野開祖はご宝前に上げられていた新しいおたすきを、日鑛新会長に手渡した。この日、贈られたおたすきの文字は庭野開祖の直筆で、これとそろいの新しいおたすきを、庭野開祖も今日の式典でかけることにしていた。法燈継承式は、大聖堂をはじめ本部施設に集まった全国の教会代表48,000人の会員が見守る中で開始された。会員がかたずをのむ思いで見つめる聖壇上で、庭野開祖は啓白文を読み上げた。

「本日、吉祥の嘉辰を選び、久遠本仏の御前に於て、法灯継承の大儀を厳修し奉る。（中略）**諸仏、諸菩薩、諸天善神、我等各々の諸願を視し給いて、甚深のおん加護を垂れ給わらんことを謹みて願い上げ奉る。立正佼成会　開祖　庭野日敬」**　　（つづく）

渉外部からのメッセージ

このところ、歩行者の列に車が突っ込む事故や高速道路での単独事故、多重事故が相次いでいます。ゴールデンウィークが重なったこともあり、特に事故の多さが目立ちます。車を衝撃から吸収する構造にすることや追突防止機能を充実させることなどが進んでいるようですが、やはり最終的には使用する人に行き着いてしまいます。その人が疲労困憊だったのか、心が散漫だったのか…、信仰の力で食い止めたいものです。

この月報はホームページでもご覧頂けます。
アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/